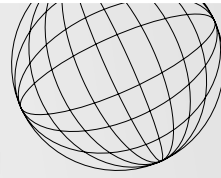


世界をみつめて3

火星からの侵入

梶川 裕司



ここ数年、TVでUFO関係の話題が、取り上げられなくなった。その理由の一つは、撮影機能付ケータイの普及であると思う。ケータイの普及以前、カメラを持って歩いている人などいなかった。だから万が一、UFOに遭遇しても、それを記録に残すことはほとんど不可能だった。それゆえ「UFO激写！」は、とんでもない特ダネだったのである。ところが今は、道行く人の大多数が、撮影機能付ケータイを持っている。もしUFOが飛んでいたなら、それが撮影されないはずはない……。さらにGoogle Earthが、われわれ一般人に、衛星からの、それも頻繁に更新される地球の画像を見せてくれる。この画像に、もしUFOが写っていたならば、誰かが必ず見つけてネット上で大騒ぎになるはずだ……。こういった状況の中で「UFO激写」という企画を出す勇気のある（または論理的判断力の欠如した）プロデューサーはいなくなった。この間の事情については、唐沢俊一「新UFO入門—日本人は、なぜUFOを見なくなったのか」幻冬社新書（2007年）がおもしろい。

UFOの実在という問題を離れて、われわれはUFO好きである。例えば、映画。映画王国アメリカを中心に、1950年代以降、数々のUFOもののSF映画が製作されてきた。有名なものだけでも「未知との遭遇（1977年）」、「インデペンデンス・デイ（1996年）」等々。最近では「宇宙戦争（2005年）」が公開された。UFOなんていないと思いつつも「宇宙戦争」は大ヒットである。この「宇宙戦争」は、1953年に公開された作品のリメイクだが、その原作はSFの父と呼ばれるH.G. ウェルズが1897年に発表した「The War of the Worlds」である。19世紀にこれだけの想像力と社会批判を兼ね備えた作品が書かれたというのは驚異である。この作品の魅力は衰えることなく、21世紀の現在でも、多くの人々がこの作品を読んでいる。その証拠の一つとして小学生向け名作文庫シリーズには必ずといってよい

ほどこの作品の簡略版が収録されている。ちなみに私も小学生の夏休み、このような文庫で「宇宙戦争」を読んで、今日にも火星人が地球に攻めてくるのではないかと、毎日、空を見上げて、撃退の方法を考えながら警戒していた経験がある。

さて、H.G. ウェルズと同姓（Welles）のオーソン・ウェルズをご存知だろうか。学生の皆さんは、新聞の英語教材の広告に出てくるひげの老人という記憶をお持ちかもしれない。しかしそれ以上の年齢では、映画「市民ケーン（1941年）」の監督であり名優である、あのオーソン・ウェルズである。そのオーソン・ウェルズが、H.G. ウェルズの「宇宙戦争」に深いかかわりを持っている。「市民ケーン」に先立つ1938年、まだ無名だったオーソン・ウェルズにラジオドラマ出演の依頼が来た。それがH.G. ウェルズの「The War of the Worlds」の朗読だった。その迫真の演技の結果、起こったものは、彼への賞賛ではなく、全米を巻き込むパニックだった。ラジオを聴いた人々は本当にアメリカが火星人に襲われていると思ひ込み、町から脱出しようとする人々、教会で最後を迎えようとする人々、火星人と戦おうとする人々で大混乱になったのである。有名な事件なのでいろいろな所で取り上げられるが、最近では「そんなパニックはなかった。でっち上げだ」というコメントが見受けられる。しかし、それはウソだ。この事件は、心理学の世界ではパニックの古典として記録されている。関心のある方は、社会心理学者キャントリル（1940年）の訳本「火星からの侵入」川島書店（1979年）をぜひ読んでいただきたい。

さきに地球人はUFO好きと書いたが、本当のところは「好き」どころではなく、それは深層にあるなんらかの、そして人類に共有された「恐れ」の象徴なのかもしれない。

かじかわ ゆうじ

（マルチメディア研究センター副センター長・教授・教育心理学）